『ま・く・ら』『もひとつま・く・ら』

柳家 小三治 講談社／講談社文庫

生田分館	請求記号：X/080/Ko19/Yan	資料ID：まくら　：700488521 もひとつ：700382583
神田分館	請求記号：J/913.7/Y53 [Knowledge Base展示中]	資料ID：まくら　：701768632 もひとつ：701778128

商学部教授　太田 和博

オンライン授業が始まり丸2年である。私は、ラジオ講座のごとく、教材を配布し、リアルタイムでオンライン授業を行っていた。一部の学生は、動画で配信してほしいという。

動画はわかりやすく、理解が深まるとの意見である。どんな動物でも動画には反応し、音声にも聞き耳を立てるであろう。しかし、文字に動物が反応することはない。動画、音声および文字では、受け取る際に働いている脳の部分が異なる。

芸術や芸能、つまりartは五感で堪能するものである。ICT技術により動画配信が容易になった現代こそ、リアルライブに価値があると断言していた。ところが、コロナ禍のため、落語の高座も厳しく制限されている。

2021年10月7日に亡くなった十代目柳家小三治は、古典落語の名手であり、それゆえ人間国宝なのだが、まくらも評判であった。まくらは和歌の枕詞が語源であり、落語の本体の前に話す小話や世間話のことである。

古典落語は筋が決まっている。一方、まくらは時事ネタである。小三治のまくらではまったく関係のない事柄が見事につながっていく。AIにはなしえない人間の発想の豊かさがそこにある。

「喋りというのはその場で、高座と客席の空間に消えてしまうことが値打ちなので、CDやテープも出したくない」とは小三治本人の弁だが、それが文字になっている。生の高座とは全く異なる受け止めができる。やや難度が高いが、トライされたい。使う脳みそが変わります。